

## 時間と意識

氏名：太田紘史、佐金武\*

所属：京都大学／日本学術振興会特別研究員、  
大阪大学／日本学術振興会特別研究員

私は今、ソーダの気泡がゆっくりと上昇し、表面付近ではじけるのを見る。そのグラスはやや汗をかいており、それをゆっくりなぞると冷たく濡れた感触が指先から伝わる。その後、ストローからソーダを口に含むと、レモンの味と香りがほのかに広がる。私が一席を占める店内には、古いジャズが遠慮がちに流れていて、ピアノで奏でられた一連の素早いノートが耳に入る。私はそれまでとりとめもなくあれこれ考え事をしてきたのだが、疲れた頭を休めるため、しばし瞑想を試みる。変化するものはもはや何も知覚されない。それでもなお、時間が流れているのを私は感じている。

ごくありふれた上の例が示しているのは、我々の意識内容には絶えざる時間の流れが本質的に含まれるということだ。空間が我々の意識を本質的に規定するという主張には賛否両論あり得るだろうが、時間についての同様の主張に対しては、伝統的に多くの哲学者が共感を示してきた。そして、種々の物理学が明らかにする時間の本性が経験される時間といかに異なるものであるとしても、時間の現象学はなおそれ固有の哲学的・心理学的意義を保持し続けるだろう。

本発表の目的は、我々の意識の時間的な特徴を明らかにし、それを適切に記述するモデルを検討することだ。そのため、我々はまず第1節において、時間の意識の現象学的分析が取り込むべき三つの事柄を提示する。その分析は、(i) 我々が直接的に意識内容の変化に気づくという現象学的データを適切に説明する（あるいは説明し去る）ものでなければならない。そして、(ii) 内容上の変化がない場合にも、その変化しない内容が続いているという現象としての時間の流れがあることも無視してはならない。さらに、(iii) 意識における時間の流れは過去から未来への向きをもち、その逆ではないことを保証するものでなければならない。

第2節では、意識の時間的な特徴を記憶に訴えて説明しようとする立場、すなわち「記憶説」を批判的に検討する。記憶説によれば、(i) や (ii) のような我々の経験の時間的な特徴は、時々刻々と変化する瞬間的な意識内容には直前の記憶やそれに基づく信念が必然的に伴うということによって分析される。確かに、意識の時間的な特徴にとって記憶が重要な役割を担うことは否定できない。しかし、我々の考えでは、短期の現象的な時間性をもつ特徴のすべてが、記憶やそれに基づく信念により完全に説明されるとすることには無理がある。

第3節では、いわゆる意識についての「表象主義」に基づき、第1節における要件 (i) と (ii) を満たす時間の現象学を展開する。経験と内容を厳格に区別して分析す

---

\* 両研究者は本発表に対し同等に寄与している。

る表象主義を時間の意識に適用すると、経験の継起と継起の経験は異なることが明らかになる。その上で、時間の現象学にとって継起の経験こそがそのメイン・ターゲットであり、経験の継起（あるいは継起的な経験）そのものはさしあたり現象学とは別個の問題であることを指摘する。時間意識の表象主義的分析は Tye(2003)によって展開されているが、そこには「一経験説」という不要な主張が含まれており、我々は表象主義的観点を徹底することでそれを放棄しうることを提案する。

第4節では、前節の表象主義的なモデルに対する Dainton(2000/2006)の批判と彼の代案「オーバーラップ・モデル」を検討する。Dainton のモデル構築の起点となるのは、前節で我々が与えた類いのモデルは彼が「繰り返し内容問題」と呼ぶものを回避できないということである。我々はまず、彼のこの批判が成り立たないことを示す。また、Dainton は、彼独自のオーバーラップ・モデルを提示した上で、経験と内容の区別を解消し、このモデルが経験内容における連続性だけでなく、経験そのものの間に成り立つリンクを保証できる点で優れたモデルであるとも論じている。だが我々は、この Dainton のモデル構築過程にはいくつかの欠陥があり、表象主義的なモデルが依然として有効であることを論じる。

最後に第5節では、時間の現象学に課せられた要件 (iii)、すなわち現象的な時間が特定の方向をもつことを中心的に考察する。この要件を満たす三つの可能性が考えられる。一つは、現象的な時間のもつこの特徴はそれ以上分析不可能とするという方針である。あるいは、時間的な延長をもつものとして経験された短期の意識内容のある部分が直近の過去や未来であることを表す、何らかの新たな現象的特性（例えば、フッサール流の「過去把持 (retention)」や「未来予持 (protention)」）を導入することも考えられる。最後に、時間そのもののもつ何らかの非対称性がそのまま現象に反映されると見なすことで、(iii) の要件を満たすことも可能だろう。我々はここで、簡潔にそれぞれの可能性を検討する。